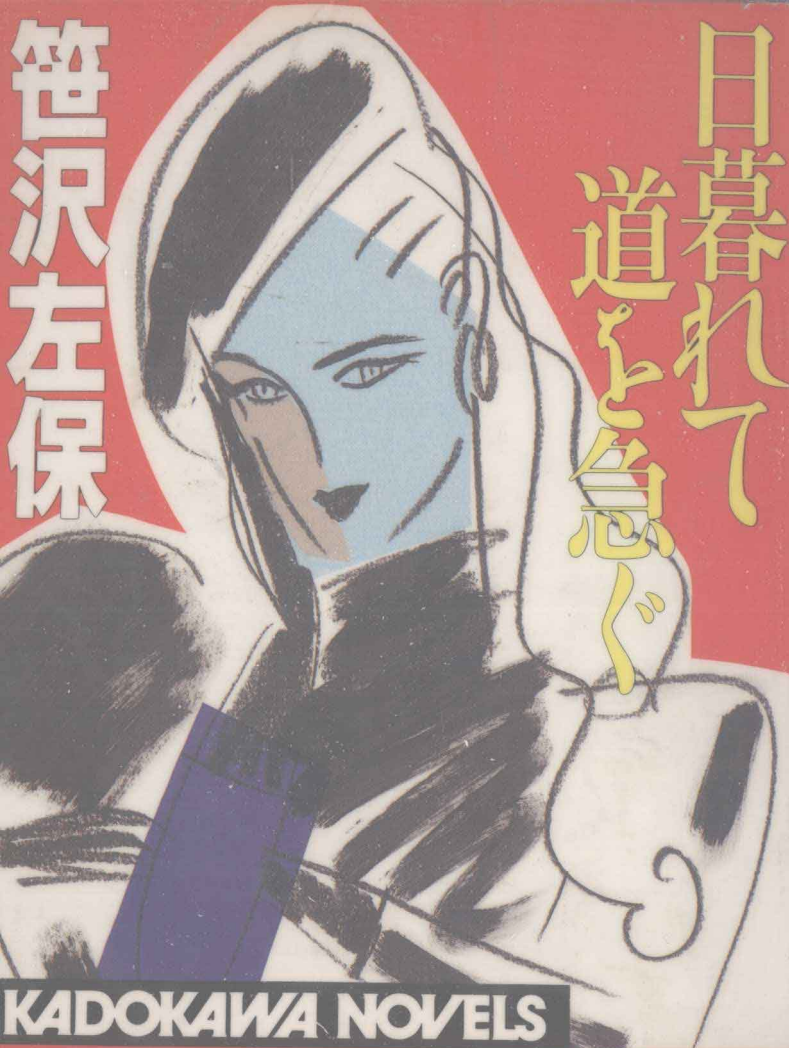




笹沢左保

日暮れて
道もと急ぐ

KADOKAWA NOVELS

“法で裁けない殺人犯は、自らの手で裁く”
復讐への執念は、燃えさかる愛と交錯した。

長編推理小説

角川

KIDOKAWA BOOKS

日暮れて道を急ぐ

笹沢左保

工業学院図書館
蔵書章



カドカワパブリズ

平成二年十一月二十五日初版発行

著者 笹沢左保 ささざわさほ

発行者 角川春樹

ひぐみちいそ
日暮れて道を急ぐ

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大谷製本

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見三二三 振替東京三一九五三〇八

〒100 電話 営業〇三二八七八五二 編集〇三二八七八五二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-772613-3 C0293

目次

第一章 砂漠の水

9

第二章 殺人の火

66

第三章 残酷の風

131

第四章 惑乱の空

180

第一章 砂漠の水

1

恐ろしくなるほど、虚無的な男であつた。ニヒリストというのではない。当人もそのようには、まったく意識していない。普通に振る舞っているし、決して言動も変わった人間のものではなかつた。

それでいて、ひどく虚無的な男を感じさせる。あるいは、本物のニヒリストなのかもしれない。ただ当人には、そういう自覚がない。自分の虚無感に、気づいていないともいえそうだった。

そんな小松原裕史が、川本花実（かわもと はなみ）は嫌いではな

つた。容姿が特に、魅力的というわけではない。顔立ちは整っているが、平凡という印象を受ける。それに、無表情であつた。どこことなく、曇天のような暗さを感じさせる。最近の若い女たちは、明るくてやさしいスポーツマンというタイプの男を、好みとしている。暗い男は、あまりモテない。小松原裕史は、背が低いほうではなかつた。だが、長身の部類には属さない。痩せているし、頼りなかつた。やや猫背なのも、小松原のスタイルを貧相にしていた。

しかし、ひとつだけとても魅力的なところがあると、川本花実（かわもと はなみ）は思う。眼差しと、目であつた。目が澄みきっていて、視線が刺すように鋭い。

小松原裕史の目を見ると、吸い込まれるような気分になる。冬空のように、冷たく澄んでいる目だった。それに、陰鬱（いんうつ）な人間を象徴するように、眼差しが限りなく暗かつた。そういう小松原の目と眼差しに、ある種の神秘性を川本花実（かわもと はなみ）は見出す

ことになる。

明朗なスポーツマンのタイプと違って、人生に苦悩する男の深みがあった。心に傷を持つ人間であり、精神的な年輪みたいなものを感じさせる。

そして、当人は意識していないニヒリズムが、男の軽薄さを消している。小松原に漂う虚無感が、彼を知的な男に見せるのだ。小松原の暗さも独特なムードになっていて、川本花実が好きである。

小松原裕史は、過去について語りたがらない。小松原の口からは、子どものころの思い出というものを、一度として聞いたことがなかった。

過去に、何かある。小松原の一生に、影響を及ぼした悲劇なのに違いない。その悲劇が小松原の心の傷と、暗さと虚無感を生み出したのだろう。

去年の夏のことだが、試しに川本花実^あは訊いてみた。どうしても、知りたかったのだ。そのために小松原を怒らせることになっても、やむを得ないと川本花実^あは覚悟した。

「裕史さんって、十字架を背負っているような気がするんだけど……」

東京駅の一番線のホームに小松原と並んで立つて、川本花実^あは雨に濡れている線路を見つめた。

「十字架……」

小松原は低音だが、声に力がなかった。

「大きな傷跡っていうか、決定的な悲劇が過去にあつて、裕史さんはその十字架を背負って生きている。裕史さんを見るとわたし、いつもそんなふうにドラマチックに考えちゃうの」

川本花実^あは、遠回しな表現を用いた。

夕方のラッシュ時で、ホームは群衆を集めている。周囲にこれだけの人がいれば、小松原裕史も本気になって怒ったりはしないだろう。いや、虚無的な彼のことから感情が揺れ動くときもないに違いないと、川本花実^あは勝手に決めていた。

「いい勘、している」

小松原の言葉は、いつも短い。

「ええっ……」

図星だと小松原が認めたのに、川本花実は一驚かずにいらなかった。

「おれは、人を殺している」

小松原は、いきなり言った。

「嘘……！」

自分の声が大きいのに気づいて、川本花実はあわててあたりを見回した。

だが、小松原と花実には、目を向ける人間はいなかった。乗客が降りきった中央線の電車へ、群衆は移動を始めていた。小松原と花実だけが、動こうとはしなかった。次の電車に乗ればいいと、黙っていても心が通じ合っていたのだ。

「それが、ほんとうなんだ」

小松原は、表情のない顔でいた。

作り話や冗談は、小松原と結びつかなかった。

小松原は正直に、事実を喋っているのである。それにしても人殺しをしたとはと、川本花実は一緊張

していた。

「ほんとに、ほんとなの」

「うん」

「ちょっと、信じられないわ」

「信じてくれとは、頼まない」

「じゃあ、信じます」

「おれ自身には、はっきりした覚えがないことだ」

「記憶していないってことなの」

「うん」

「どうしてなの」

「小っちゃかったからだろう」

「小さいときのことなの」

「当たり前だよ」

「当たり前って……」

「物心ついてから、人を殺したりするもんか」

「まだ、何もわからないっていう年だったのね」

「そう、いえるだろう」

「いくつのときなの」

「五つのときだそうさ」

「五歳……！」

「少年になってから、近所の噂うわさや親戚しんせきのお喋りしゃべなおばさんの話で、詳しいことを知ったんだけどね」

「その子と、どういう関係だったの」

「隣りに住んでいた子どもだ」

「いくつだったの」

「同じく、五歳の男の子だ」

「だったら、いい遊び相手だったんでしょね」

「仲よしだったらしい」

「五歳の子どもに、殺意なんて湧わくのかしら」

「まさか……」

「殺意なんて、なかったわけね」

「そうだろう」

「罪の意識だつてないでしょ」

「うん」

「裕史さんが、覚えているのはどんなことなの」
「警官にいろいろと訊きかれたことと、そのあとすぐに引越したことだ」

「そうか。そこには住んでいられなくなるってことも、あるんでしょね」

「だけど、引越した先でも、たちまち近所の噂うわさになつたらしい。だから、近所の家の親たちは、子どもをおれと一緒に遊ばせなかった」

「危険人物っていうことね」

「おれはいつも、ひとり庭で遊んでいた。外へ出ると白い目で見られたり、人殺しって言われたりするんで、母親がおれを庭の中に閉じ込めておいたようだ」

「可哀想かわいそうに……」

「五歳のときから小学校を出るまでは、おれに友だちも幼馴染おきななじもいなかった」

「そうなっちゃうでしょね」

「中学へ進んで、やっと人殺しから解放された」

何とか君を……」

「和成、尾高^{おだか}和成、平和の和に成功の成と書く」

「和成君を、助けようとはしなかったの」

「自分たちは、赤ん坊を抱いていた。それに、泳げなかったんだろう。だから二人の主婦は、大声で叫びながら人を呼びに走った。すぐ五、六人も駆けつけて来たけど、間に合わなかった」

「溺死^{できし}ね」

「池は深かったし、頭から落ち込んだ和成はもちろん泳げなかった」

「じゃあ、浮かんでもいなかったのね」

「池の底に沈んでいるのを、見つけるのにも時間がかかったようだ。人工呼吸も、効き目がなかったらしい」

「いずれにしても、ふざけてやったことだったんだわ。五歳の坊やに殺意^わが湧くわけはないし、殺してやろうなんて考えるはずがないもの。殺人という行為が何を意味するかも、理解できる年齢じ

「普通の少年に戻れたのね」

「以後は、人生も普通だった」

「殺したっていうけど、五歳の坊やはいったいどんな行為に及んだの」

「近くに、二百メートル四方の池があった。その池の岸で、二人は遊んでいた。だけど、おれは何を思ったのかいきなり、和成^{わなり}という仲よしの遊び友だちが突っ立っているのを、後ろから突き落としたんだ」

「ぶつかったか、触れ合ったかしたんじゃないくて

……？」

「目撃者がいた。赤ん坊を抱いた近所の主婦が二人、立ち話をしながらおれたちのほうを見ていた」

「その目撃者が、裕史さんが故意に突き落としたんだって、証言したのね」

「うん」

「それなのに二人の主婦は、池に飛び込んでカズ

やないでしょ。だからこそ白昼、人が見ている前で、和成君を突き落としたりしたんでしょ」

「憎むことも、腹を立てることもなかっただろう。喧嘩けんかひとつしたことがない仲よしだったというしね」

「ふざけて和成君の背中をドンとやったら、池の中へ真つ逆さまに落ちてしまったってことなのよ」

「いまもおれの記憶には、いつも一緒に遊んでいたという和成の思い出しが残っていない」

「五歳では責任能力がないから、犯罪にはならないんでしょ」

「警察へ連れていかれて、警官にいろいろと訊きかれただけだった」

「保護観察とか、児童相談所へ送られるとかいうことも、なかったのね」

「何もなかった。事故扱いと、変わらなかったんだろう。おれがその直後に経験したのは、家中が

杉並区すぎなみから、練馬区ねりまへ引つ越したということだけだ」

「だったら何もなかったのと同じで、裕史さんの過去には仲よしの和成君が、事故死したというこ
としが残っていないんじゃないかしら」

「そうはいかない」

「どうしてなの」

「いくら幻影に似た殺人でも、おれにとっては消せない事実だ」

「そう思うから、いけないのよ」

「どんなに考えまいと努めても、まぼろしの殺人にはなりきらない」

「でも裕史さんの過去には、殺人とか犯罪とかの記録が、まったく残っていないんでしょう？」

「記録は、おれの心に刻まれている」

「まあ、第三者には量り知れないものが、心の傷として残っているんでしょうけど……。それが、裕史さんの背中にある十字架ってことなのね」

「和成ひとりの死に、終わらなかつたということもある」

「それ、どういうこと？」

「おれはもうひとりの人間の死を、招き寄せているんだ」

「誰がどうして、死んだっていうの」

川本花実は、小松原裕史の腕を掴んだ。

次の電車が到着して、終点の東京駅のホームへ乗客が吐き出されている。その電車に乗る人たちが、各ドアのあたりに列を作っていた。小松原裕史と川本花実は、またもや電車の発車を無視した。「尾高成太郎、和成の父親だ。自殺したんだ」無数の糸が降り注ぐような雨を、小松原裕史は暗い目で見上げた。

夏の日暮れは遅く、雨天でもまだ暗くない。鉛色の厚い雲が空を閉ざし、東京駅近辺のビル街が都会的な雰囲気失っていた。

「和成君のことが原因で、お父さんが自殺した

の」

川本花実は、小松原の身体に触れていることに気がついて、さりげなく手を引つ込めた。

「うん」

小松原は、無表情だった。

和成は、ひとりっ子であった。父親の尾高成太郎は、子煩悩でもあり和成が可愛くて仕方がなかつたらしい。和成の死は当然、人が変わるほどのショックを、尾高成太郎に与えた。

尾高成太郎は、若い弁護士だった。いわゆる革新派といわれる若手弁護士で、進歩的文化人の代表のような存在であったという。人権擁護という観点から、被告の弁護に徹する尾高成太郎の弁護には、大向こうの喝采を浴びることで定評ありとされていた。

尾高成太郎は犯罪を悪とせず、犯罪に走る人間の不幸な人生を悪とする、というのが持論だった。どんな凶悪犯だろうと無罪にしようとする弁護士、

被害者より加害者を支援する犯罪者の味方、ということでも知られていた。

ところが皮肉にも、その尾高成太郎が被害者の父親になってしまったのである。被告の弁護士としては刑罰そのものを強く否定し、自分の子どもが殺されたからといって、急に犯人や罪を憎むわけにはいかない。

まして和成を死に追いやったのは、責任能力のない五歳の幼児であった。刑事事件は成立しないし、犯人は何ら責任を問われることがない。

しかし、尾高成太郎も人間であり、波立つ感情というものを持っている。この世でいちばんの宝物であるわが子を殺されて、初めてやり場のない怒りと憎しみに耐える苦痛を知った。

その辺のところにも、反体制派の弁護士の苦悩があつたらしい。尾高成太郎は、和成が死亡した日から、いつさいの弁護士活動を停止した。

誰とも会おうとせずに、家の中に引きこもって

いた。そして、和成の四十九日の法事を終えたその夜、尾高成太郎は自宅で青酸ソーダをカプセルに詰めて嚥下し、服毒自殺を遂げたのである。三十五歳だった。

走り書きの遺書には、次のようなことが記されていた。

生き甲斐である和成を失った。

和成をあの世へ送った犯人を、私は恨まずにいられない。わが子の一命を奪った人間に、私は罰を求めずにはいられない。私はそこに、人間の矛盾を見出した。私は人間として三流であり、和成のそばにいてやることしか能がないことを知り、わが子のあとを追うのが最善との結論に達した。

「こういう遺書の内容も、おれが中学にはいつてから親戚のお喋りお婆さんが、詳しく聞かせてくれたのさ」

それが癖なのだが、小松原は両肩を前に寄せるようにして首をすくめた。

2

小松原裕史と川本花実とは、やっと中央線の電車に乗り込んだ。別に車内へ突き進んだりはいしなかったが、二人並んで座席にすわることができた。

鮎詰めの満員電車だが、声はかき消されることになる。何を話そうと前に立ち並ぶ人々に、聞き取られる心配はなかった。隣りに腰かけている乗客も、夕刊を広げていた。二人は互いに顔を寄せ合えば、密談も可能であった。

川本花実とは、荻窪で下車する。小松原裕史は、国分寺まで乗って行く。まだ、時間もあつた。初めて、小松原の過去の秘密を知つた。小松原の意外な告白を聞いたということで、川本花実はかなり興奮していた。

「この話、真由子さんも知っているの」

川本花実とは、かつての義妹の名前を持ち出した。かつての義妹の中丸真由子は、つまり川本花実の亡夫の妹ということである。川本花実の夫だった中丸時彦は、一年半前に心不全ということで急死した。二十八歳の若さだった。

川本花実の結婚生活は、わずか一年で終わった。子どもも、できなかった。そういうことであれば、夫の一周忌がすぎるのを待って、離婚するのが当然である。

今年の二月になって、中丸花実から旧姓の川本花実に戻つた。再び、独身になったのだ。だが、いまは川本花実が、中丸時彦の行年と同じ二十八歳になっている。

中丸真由子は、時彦の妹であつた。したがって、川本花実にとつて中丸真由子は、かつての義妹ということになる。真由子は三か月前から結婚を前提として、国分寺のマンションで小松原と同棲を

始めていた。

小松原は、三十一歳である。五つ違いの真由子とは、似合いのカップルだった。その真由子にも過去の異常な経験を告白したのかと、川本花実はなみは小松原に訊いたのであった。

「いや……」

小松原は、首というより顎あごを小さく振った。

「そう」

花実は何となく、安心していた。

「人に聞かせて、楽しい話じゃないからね。黙っているのに、越したことはない」

「じゃあ、これまでに裕史さんの告白を聞いた人って、あまりいないのね」

「あまりどころか、おれが打ち明けた相手はひとりもない」

「わたしが、初めてなの」

「ほかには、誰もいない」

「そうだったの」

「話す必要が、ないからな」

「それにしても、ずいぶんスラスラとわたしに話してくれたわね」

「不思議と、抵抗感がなかったな」

「どうしてでしょう」

「これまで、おれの過去に何か隠されているんじゃないかなんて、突っ込んで来た人間はひとりもいなかった。十字架を背負っている、それはドラマチックな経験による心の傷跡じゃないのか。そんなふう質問したのは、花実さんが初めてでね」

「それで堰せきが切れてしまつて、告白が溢あふれ出たのかしら」

「意外と相手次第では喋しゃべってしまいたいという気持ちだが、おれにはあつたのかもしれない」

「告白願望ね」

「誰かひとりぐらいには、打ち明けておきたいという心理が、十字架を背負った人間にはあるんじ

やないのかな」

「わたしは、打ち明けてもいい相手だったのね」

「うん」

「どうしてなの」

「信頼できるからだろう」

「わあ、光栄だわ」

「花実さんは、勘が鋭い。何しろおれの過去を初めて、見通した人なんだからね。そういう人には、安心して話ができる。秘密を、守ってくれるだろうしね」

「当然、秘密は守るわ。いまさら裕史さんの弱みにはならないようなことだけど、他言無用にしておいたほうがよさそうですものね。真由子さんにも質問されないうちは、黙っていたほうがいいと思う」

「訊かれない限りは、死ぬまで喋らないだろう」
「その話を聞いたからって、真由子さんが動揺するようなことはないでしょうけど、耳に入れずに

すむんだったらそのほうがいいわね」

「いや、花実さんに打ち明けたことで、もう告白願望は満たされた。また永遠の秘密として、蓋を閉じて地中に埋めよう」

小松原は、腕を組んだ。

「ついでに、裕史さんもそのことを忘れたら？」

花実は言った。

小松原は、返事をしなかった。目を閉じている。喋り疲れたのかもしれない。小松原にしては、珍しくよく喋った。いつもの小松原は、寡黙であつた。忘れたところに、ふと口を挟むのがせいぜいである。

普通の人間ならば、当たり前の量のやりとりでも、口の重い小松原には気疲れの因になるのだろう。それに小松原の過去の人生において、最も重大なポイントといえる傷跡につき打ち明けたのだから、精神的にも消耗したのに違いない。

花実は何度か、小松原の眠っているような顔に

目をやった。そのたびに、胸の中に温風が吹き込むような満足感を、花実はずわわつた。

小松原は過去の秘密を、ただひとりの人間だけに明かした。ほかに誰も、喋った相手はいない。すでに一緒に住んでいて、妻と変わらない中丸真由子にさえ、話してはいないという。

そのただひとりの人間に選ばれたことが、花実は嬉しかったのだ。それだけ小松原に、信頼されているということになる。心から信頼されるといふのは、小松原の人間関係のうちで花実がいちばん、重きをなしていることを意味する。

花実は、大洋電工の本社に勤めている。大洋電工本社は、大洋丸ビル内にある。大学を出て、大洋電工に入社した。以来ずっと、本社の総務部に勤務している。

中丸時彦と見合を経て結婚したときも、花実は会社を退職しなかった。赤ン坊ができるまでという条件で、中丸時彦も共稼ぎに同意したのであつ

た。

しかし、妊娠するどころか一年で、花実は未亡人になった。結局、会社を辞めることにはならなかった。中丸時彦の死後も、独身に戻ったOLとして、花実は大洋電工の社員でいる。

小松原裕史も、大洋電工本社に勤務していた。もちろん社員歴は小松原のほうが長いが、花実の上司ということではなかった。小松原は、技術開発企画室に所属している。エンジニアリングの専門家であった。

国立大学の工学部をトップで卒業したというが、死神みたいに暗い感じのニヒリストがいると、花実が入社したときから小松原はそんな評判だった。間もなく、会社のオペレーションズリサーチの会議にオブザーバーとして、ともに参加したことから小松原と花実を知り合った。社内でも孤立していて、心安い仲間を作らない小松原と、やがて花実は個人的に親しさを増していく。

そのころから、花実はなみは小松原の虚無的なムードに魅力を感じていた。中丸時彦よりも、小松原との付き合いのほうが長かったのだ。それなのに、事の成り行きというものがあつて、花実はなみは中丸時彦と結婚した。

中丸時彦の死後、今度は一年間の義妹であつた真由子まゆこを、小松原に紹介した。まさかと思つていたのに、小松原と真由子まゆこの仲はたちまち男女関係に進展した。

しまつたと気がついたときは、もう手遅れであつた。花実はなみが紹介して三か月後に、小松原と真由子まゆこは一緒に住むことになつた。後悔しても、始まらなかつた。

一時期であろうと義妹だつた真由子まゆこの恋人に、熱くなることは許されない。真由子まゆこを愛したとなれば、ほかの女に目移りするような小松原でもないだろう。

小松原とは、男女としての縁がなかつたのであ

る。一定の間隔を保つた友だち同士でいるほかはないと、花実はなみは努めて諦めようとしていた。

それでも、真由子まゆこに嫉妬しやうとすることがあつた。小松原と二人きりになりたいと、せつない思いに捉とらわれるときもある。だから、小松原が誰にも話していない秘密を、自分だけに打ち明けてくれたということが、花実はなみはひどく嬉しかったのだつた。

小松原の過去の傷跡を、二人だけの秘密にしておきたい。それが、真由子まゆこに対する唯一の優越感になる。そんな気持ちもあつて花実はなみは、真由子まゆこには聞かせないほうがいいと、小松原に釘くぎを刺しておいたのである。

「けどね」

小松原が目をあけたのは、電車が新宿駅で停車したときであつた。

「なあに？」

花実はなみは思いきつて、小松原の口に顔を近づけた。「十字架はやはり、十字架として残るだろうな」